

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：28001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K14013

研究課題名（和文）民俗芸能を創造する実践コミュニティとしての学校に関する研究

研究課題名（英文）A research study of the school as a performing arts community of practice

研究代表者

呉屋 淳子（GOYA, Junko）

沖縄県立芸術大学・音楽学部・准教授

研究者番号：10634199

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、文化的アイデンティティが複雑に交錯する場としての学校に着目し、学校と地域の相互行為から生成する民俗芸能の実践を考察に据えながら、民俗芸能の継承をめぐる議論をより発展的な視点から検討を行った。

東日本大震災で被災した宮城県山元町では、地縁・血縁といった帰属性を問わない学校という場と地域社会との関わりの中で、民俗芸能の実践を通じ、新たなコミュニティが形成されている。また、学校、保存会などのアクターの相互行為が、お互いの芸能に対する意識を変容させ、民俗芸能の担い手や関係者のレジリエンスを引き出すという状況を生み出していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、地域の民俗芸能の継承（教育）には、地域の担い手以外に多様なステークホルダーが関わるようになってきている。特に、公教育をはじめ高等教育機関では、民俗芸能を部活動やカリキュラムに導入する取り組みが盛んに行われており、そこでは学校と地域の相互作用から、新しい地域文化としての「学校芸能」が生まれている。

地域内の多様な関係性をどうとらえていくか、また、「学校芸能」の持続可能性を考えることは、地域で育まれてきた民俗芸能の内側と外側にいる人々の両方に目を向けることでもある。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the school as a place where cultural identities interact in a complex way, and examines the discussion on the transmission of folk performing arts from a more developmented point of view, focusing on the practice of folk performing arts generated from the interactions between the school and the local community.

In Yamamoto-cho, Miyagi Prefecture, which was suffered from the Great East Japan Earthquake, a new community has been formed through the practice of folk performing arts in the context of the school and the local community, regardless of their belongings, such as fidelity or kinship. In addition, the interactions between actors such as schools, preservation societies, etc., created a situation in which they transformed each other's attitudes towards the performing arts and enhanced resilience of the successors and stakeholders of the folk performing arts.

研究分野：文化人類学

キーワード：民俗芸能 学校芸能 学校教育 実践コミュニティ レジリエンス

1. 研究開始当初の背景

本研究は、文化的アイデンティティが複雑に交錯する場としての学校に着目し、学校と地域の相互行為から生成する民俗芸能の実践を考察に据えながら、民俗芸能の継承をめぐる議論をより発展的な視点から検討する。近年、学校教育の現場でも伝統芸能や民俗芸能の教授がおこなわれるようになったことから、芸能の継承をめぐる状況も大きく変化している。

また、今日における学校という場は、地域社会との連携が強化されたことによって、より地域社会の影響を受け、学校教育のあり方自体も急激に変化している。同時に、そのことは、地域社会の解体や再編あるいは統合といった出来事も学校教育に大きな影響を与えることを意味する。たとえば、東日本大震災以降、被災地の民俗芸能の保存と継承に関わる課題が、学校のなかにも持ち込まれるようになってきている。高倉(2014)の報告によれば、民俗芸能を、学校教育を通して「存続」させていくための取り組みは、文化的伝統の正統性と被災地の現実的問題が混在する日常のなかで、帰属性を問わない学校と地域の関わりの中で行われている。

そこで申請者は、これまでの理論的枠組みを踏襲して、現代的な文脈における民俗芸能の継承やそのあり方を動的に捉え、民俗芸能を創造する場としての学校と地域を包括的に検討する必要があるという結論に至った。具体的には、申請者がこれまで調査対象としてきた沖縄・奄美のほかに、東日本大震災で被災した宮城県山元町を考察の対象に加えながら、民俗芸能を創造する「場」としての学校に着目し、現代を生きる人々がどのように民俗芸能を認識し、受け継ごうとするのかという現代的なテーマに取り組む。2011年の東日本大震災以降、民俗芸能の実践は、地域再生の「原動力」として捉えられ、地域コミュニティの復興に民俗芸能が果たす役割について積極的な議論がなされてきた。しかしながら、今日消滅ないし著しい変容をみせている被災地の民俗芸能が、学校という場と密接な関わりについて焦点を当てた議論がされない状況が続いている。こうした被災地の状況を鑑みて、2015年7月から申請者が行った事前調査では、被災した小学校が統廃合になった以降も、被災地で継承されてきた民俗芸能の導入が統合先の学校で、積極的に行われていたことが明らかになった。そして、こうした活動は、学校を主体としながら、被災者と非被災者によって構成された新しい地域コミュニティの人々の協力のもとで指導が行われていた。一方で、学校は、地域から自立した場であると捉えられてきたが、地域のさまざまな力が働く場であり、地域ごとの特異性が複雑に入り込む場でもある。これは、学校と地域が相互に理解し、互いの活動を容認し合うことが、決して容易なことではないことを意味している。しかしながら、沖縄・奄美、そして被災地の宮城県山元町における学校では、学校と地域の相互行為を通して民俗芸能を創造しているという状況があると同時に、帰属性を異にする人びとが民俗芸能を創造する実践を通して新たなにコミュニティを生成している。人びととコミュニティの関係について平井(2014)は、人びとは、コミュニティの中で実践に参加しながらも、そうした実践を通して行為遂行的にコミュニティを作り上げていると指摘し、それゆえコミュニティは安定した集団というよりは、つねに変容する過程にあると説いている。

文化的アイデンティティが複雑に交錯する場としての学校から民俗芸能の実践の考察を通して、学校と地域の狭間にある諸問題を浮き彫りにし、平井(2014)が提唱する「実践としてのコミュニティ」の視点を以て学校教育が民俗芸能の継承に果たす役割や機能を複合的に明らかにしていく。同時に、現代的な文脈における文化継承のあり方や新たに生み出される芸能を視野に入れ、かつ歴史的経緯を考察の対象に据えながら、学校と地域の相互行為から民俗芸能が創生される過程を分析していく。そして、複雑なアクター(政治性、文化・歴史性)が絡み合う被災地における民俗芸能の動態性や創造性に着目しつつ、持続的な芸能の継承のありかたを探る。

2. 研究の目的

本研究は、学校と地域の相互行為のなかで生起するコミュニティのなかで実践される民俗芸能に着目し、現代的な文脈のなかで生み出される民俗芸能のメカニズムについて明らかにすることを目的とする。今日消滅ないし著しい変容をみせている民俗芸能は、学校と地域が密接に関わりながら新たに創造されている。しかし、それらは必ずしも地縁や血縁、出自など共同体的な紐帯を基盤としたコミュニティではなく、近代化やグローバル化、災害など、生活の都合に応じてさまざまな境界をもった脱領域化されたコミュニティのなかで生み出されている。本研究は、現代を生きる人々がどのように民俗芸能を認識し、受け継ごうとするのかを、学校と地域の相互行為から生まれる新たなコミュニティの実践から検討する。

3. 研究の方法

本研究は、地縁的にも血縁的にも異なる人々が、民俗芸能の実践を通して新たなコミュニティを生成するプロセスに着目し、民俗芸能の変容や創造の多様な様相を明らかにしながら、被災地の小学校における民俗芸能の継承と教授形態の今日的状況を描き出す。その際、学校における参与観察や聞き取り調査、カリキュラムに関する資料収集に加え、

学校で実践される民俗芸能とそれに関わる指導者と学習者の関係性に焦点を当てて記述を行う。そして、文化的アイデンティティが複雑に交錯する学校の特徴を明らかにし、それが、小学校の教育課程のなかで継続的な民俗芸能の実践にいかなる影響を与えているのかを、学校と地域の相互行為と民俗芸能を実践する新しいコミュニティの生成から考察していく。

4. 研究成果

本研究では、文化的アイデンティティが複雑に交錯する場としての学校に着目し、学校と地域の相互行為から生成する民俗芸能の実践を考察に据えながら、民俗芸能の継承をめぐる議論をより発展的な視点から検討を行った。本研究を通して明らかになったことは、次の通りである。まず、地域の民俗芸能の継承（教育）には、地域の担い手以外に多様なステークホルダーが、積極的に関わるようになっている。民俗芸能を部活動やカリキュラムに導入する取り組みも盛んに行われており、そこでは学校と地域の相互作用から、新しい地域文化としての「学校芸能」（呉屋 2017）が生まれている。

また、地域内の多様な関係性をどうとらえていくか、そして「学校芸能」の持続可能性を考えるためには、地域で育まれてきた民俗芸能の内側と外側にいる人々の両方に目を向けることが不可欠である。さらに、東日本大震災で被災した宮城県山元町では、地縁・血縁といった帰属性を問わない学校という場と地域社会との関わりの中で、民俗芸能の実践を通じて新たなコミュニティが形成されている。そこでは、学校や保存会などのアクターの相互行為が、お互いの芸能に対する意識を変容させ、民俗芸能の担い手や関係者のレジリエンスを引き出すという状況が生み出されている。

以上、民俗芸能を継承・理解しようとする人々が、それぞれの民俗芸能の継承をめぐる取り組みと、芸能を「創造」させようとする姿を、民俗芸能を実践するコミュニティとしての学校から描くことによって、民俗芸能の持続的継承の様相を具体的な事例をもとに明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

<p>1. 著者名 高倉浩樹、山口睦、小谷竜介、今石みぎわ、久保田裕道、依木悟、稲澤努、呉屋淳子、一柳智子、川島秀一、セバスチャン・ペンマレン・ボレー、福田雄、黒崎浩行、堀川直子、及川高、スーザン・ブーテレイ</p>	<p>4. 発行年 2018年</p>
<p>2. 出版社 新泉社</p>	<p>5. 総ページ数 283</p>
<p>3. 書名 震災後の地域文化と被災地の民俗誌</p>	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	向井 大策 (MUKAI Daisaku) (10466980)		
研究協力者	矢野原 佑史 (YANOHARA Yushi)		